本特集
テーマの
next

新学習指導要領下で、生徒の「マイ・ストーリー」の形成を支援する教師に求められること

大学入試における次の大きな変化は、新学習指導要領に対応して実施される2025年度入試だ。歴史的な改訂と言われる新学習指導要領には、教育目標や学び方、学習評価などにおいて、新たな視点が盛り込まれた。それらを踏まえて、生徒の「マイ・ストーリー」の形成を支援する教師には、どのようなことが求められるのか。本特集の内容とともに、ベネッセ文教総研所長の西島一博が総括する。

ベネッセ文教総研　所長
西島一博

新学習指導要領で一層求められる「マイ・ストーリー」を描く力

生徒が自身の学びや活動を振り返り、それを次の学びや活動に生かしたり、その積み重ねを他者に向けて表現したりする力の育成は、これまでも先生方が重視してきたことだと思います。2022年度から実施される高校の新学習指導要領では、その重要性がますます高まると考えます。本コーナーでは、新学習指導要領における授業や指導の変化を押さえながら、生徒の「マイ・ストーリー」の形成を支援する重要性と、教師に求められることをお伝えします。

予測困難な時代の中で、新学習指導要領では、自らの人生を切り拓く上で必要な資質・能力の育成が求められています。そうした資質・能力を育成するための視点が、知識・技能の習得中心の学びから脱却し、探究のプロセスを経験することや、身につけた知識・技能を活用することが重視される「主体的・対話的で深い学び」です。そうした学習活動を通して、生きて働く知識・技能の習得を含む、多様な資質・能力を身につけることを目指すわけです。

各教科書会社のウェブサイトで公開されている、新学習指導要領に対応した教科書の案内を見ても、生徒が主体となって探究的・協働的な学びを進めたり、学習内容を基に自己表現をしたりする活動を支える内容が充実しています。例えば、「地理総合」や「歴史総合」の教科書では、単元が「問い」から始まるものが多く、「覚える」から「考える」という学習観への転換を表しているように思います。また、問いについて考えを深めるための様々な資料が、2次元バーコードのリンクも含めて用意されています。

シラバスやルーブリックで、育成を目指す資質・能力や学び方を伝える

学校全体で「主体的・対話的で深い学び」の実践を推進するため

には、どんな資質・能力をどのような学び方を通じて身につけるのかを、言語化、意識化して、教師同士はもちろん、教師と生徒で共有することが求められます。そして、その共有に有効なツールが、シラバスやルーブリックです。それらを活用しながら、教科ごとの教育目標はもちろん、「3年間でこんな資質・能力や学び方を身につけてほしい」「こんな生徒に育って卒業してほしい」など、長期的な視点での教育目標や、そうした目標を設定した理由を、様々な機会に生徒に伝えることが重要です。

生徒自身が、「今の時期に身につけるのはこの資質・能力だ」などと意識して学びを進めることこそ、生徒が「マイ・ストーリー」を形成していくプロセスにほかならないからです。

振り返りを積み重ね、生徒のメタ認知能力の向上を

生徒の資質・能力を向上させるためには、自身の学びを振り返る機会を充実させることが大切です。振り返りの精度を高めるために、ルーブリックなどを基に、授業を通じてどのような気づきや学びがあったのか、どういった資質・能力が身についたのかなどを自己評価させます。それを繰り返す中で、生徒は目標に向かって着実に成長しているといった達成感を持ったり、「もっとこんな力を伸ばす必要がある」といった課題意識を抱いたりして、次の学びに主体的に向かうのです。

さらに、そうした振り返りを積み重ねていくことにより、生徒は次第に自身を客観視できるようになり、いわゆるメタ認知能力が向上します。それによって、自身の学びをますます豊かにし、また、「マイ・ストーリー」を形成・表現する力も高まっていくでしょう。

生徒が自分を客観視する上では、教師による形成的評価も大きな助けになります。学習の過程で生徒の理解度を確認し、生徒と教師がその後の学習改善や授業改善に生かしていく形成的評価は、まさに生徒の成長を促すための評価です。教師は、生徒の学びの姿を見取る際には、生徒が自身の過去と比べてどういった点がどのように成長したのかを自覚できるように支援することが重要です。それこそが、新学習指導要領で求められている評価観の軸だと思います。

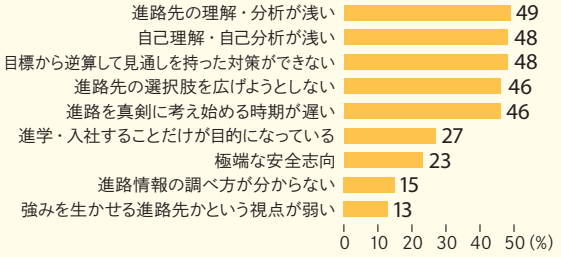
進路指導において、生徒の自己理解・自己分析の浅さや、目標から逆算して見通しを持つことができない生徒がいることを課題と感じている教師は少なくありません（**図1**）。日々の学びをルーブリックや形成的評価で確認する中で育まれた「マイ・ストーリー」を形成する力は、自己理解を深めたり、目標から逆算して見通しを考えたりする際にも求められます。形成的評価をこれまで以上に意識的に行うことは、進路指導上の問題解決にもつながるのです。

これからの大学入試は「マイ・ストーリー」の形成力・表現力を評価する方向へ

ここまで見てきたように、生徒が目標を持って学びを進めるとともに、自身の成長を言語化していくプロセスは、まさに生徒が「マイ・ストーリー」を描く過程と重なります。つまり、新学習指導要領下では、生徒一人ひとりが自身の学びや活動、そこでの気づきを蓄積し、それをストーリー化して表現するプロセスによって深い学びが実現すると考えられるのではないでしょうか。

「マイ・ストーリー」を形成・表現する力は、これからの大学入試においてもますます求められる

図1 進路指導において教師が感じる生徒の課題



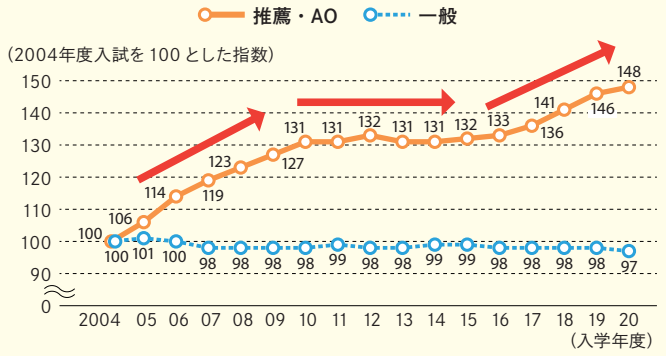
※ベネッセ教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」（2021年2～3月にウェブとファクスで実施）を基に編集部で作成。

ことと思われます。これまでの推薦・AO入試の拡大傾向（図2）は、今後の学校推薦型選抜や総合型選抜でも続くことが予想されるほか、一般選抜においても、活動報告書等の提出を求める大学が増えるなど、多面的・総合的評価を重視する流れが強まっていくと考えられます。生徒の「マイ・ストーリー」の形成力・表現力を評価する方向に向かっているといった言い方もできるでしょう。

その背景には、これまでの推薦・AO入試などで、「マイ・ストーリー」の形成力や表現力の評価を経て入学した学生は、ペーパーテストのみでの評価を経て入学した学生に比べ、4年間での成長の度合いが大きいといった各種データが出てきたことがあります。20年度に実施された大学入試改革は、新学習指導要領への移行を見据えたものであり、新学習指導要領に対応した25年度入試が制度面や形式面で大きくは変わらないとしても、「マイ・ストーリー」の形成力や表現力の評価がより重視されると予測されることは留意しておくべき点でしょう。

これからの社会を生き抜く上で必要な資質・能力を生徒に育成するためにも、大学入試で生徒の希望進路を実現させるためにも、「マイ・ストーリー」を描き、語れる生徒を育てるという視点から、新学習指導要領を改めてひもとき、授業や指導を見直していく意義は大きいのではないでしょうか。

図2 国公立大学における各選抜の入学者の推移



※文部科学省「国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況概要」を基に編集部で作成。

イベントのご案内

VIEWnext PRESENTS

2021年10月4日(月) オンラインで開催！

本誌特集テーマとも連動！

自校の研修・会議に使える！ 対話促進スキル向上・オンライン講座

2021年度大学入試、躍進の一因「キャリア検討会」
――教師同士の対話を促すポイントを探る――

講師

長崎県立諫早高校
教務主任
後田康蔵

◎2018年度まで進路指導主事、19年度から教務主任を務める。同校の「キャリア検討会」導入において中心的役割を担った。

VIEW next 編集部は今年度、対話型の研修や会議を実現するために必要な対話促進スキルの向上を目的としたオンライン講座を、特集のテーマと連動させる形で開催しています。今回は、2021年度大学入試において学校推薦型選抜・総合型選抜での合格率が7割という実績を残した長崎県立諫早高校の「キャリア検討会」の詳細とともに、そうした場の進行役の教師が、参加者同士の対話を促進するために施すとよい工夫や配慮について、同校の教務主任で、「キャリア検討会」導入の立役者の1人でもある後田康蔵先生に、お話をいただきます。

開催日時　2021年10月4日(月) 16時30分～17時40分
形式　オンライン（ライブ配信）※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。
参加申し込み方法　右の2次元コード、または下記URLから登録してください。
https://enquete.benesse.ne.jp/forms/o/we69d9dd5d/form.php
参加申し込み締め切り　2021年9月29日(水)　参加費　無料